

的なものをあらためてくりだす出発点としてつねに最適のものであったのだろう。

しかし、枕木のような人為的な無機物は、ほんらい無機物であるものよりも過剰に無機的なであり、それによって構成された擬似有機体は、自ら分解していく一種奇形な構成物となる。それは、死体によって構成された共同体のようなものなのだ。そして、このような過剰性のひしめきあいのなかから作品を残さずとするならば、どうしても過剰性そのものを緩和しなくてはならなくなるのである。かくして枕木は、しだいに木材に近づいている。しかし、そうはいっても、ゲールで黒く色付けされ、木口に鉄の輪をはめた太い材木は、十分意味の緊張状態の恐怖をつくりだしており、むしろ適度に緩和された素材は、過剰なほどバランスのとれた構成物をつくりだし、その作品は、どうにも始末におえない廃棄物として、美術の内部に無条件に君臨するのである。

古屋俊彦

しかし、虚構とはほんらい、多重的に機能を封鎖されていくことにより、その都度われわれの手に新たな機能を置き去りにするものでしかないのだ。

古屋俊彦

TOKYO

向山喜章
コバヤシ画廊

9.5-9.10

気体や液体などの流動体のみで成り立つ作品は存在しないのであるが、流動体のなかに幾何学的関係性を示すことはよく行なわれる。ただ、流動体そのものの充実感や求心性は、おそらく日本人にとってとはとりわけ重要なものなのであり、それは、容器に入れられたり、境界面から幾何学的に指し示すことによってはけつて得られない感覚なのである。

向山喜章は、コンクリートやワックスを使って、流動体と固体とのあいだの緩やかな移行や往復運動そのものを作品の主要な問題としている。今回の個展では、約百二十キロのワックスを円盤状に固めたものと円柱状に固めたものが一点ずつ出展された。ワックスは三種類、微妙に異なった黄色の濃度をもったものを型に流し込む段



向山喜章 Kisho Mukaiyama
手前—マルユレエターF 1993 wax 160×10cm
奥—マルユレエターN 1993 wax 80×65cm 撮影=山本 耕

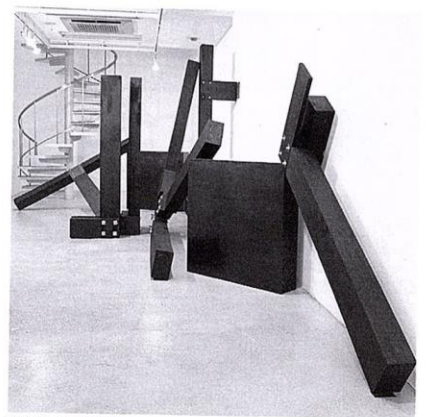
のなかに写されたいわゆる名画の複製を、油彩で正確に拡大して模写し、その上にブラッシュペイントやストライプを書き加える作品をつくっている。今回の個展では、フェルメール、ダウインチ、ミレーの複製に加えて、メイプルソープの写真的複製と、テレビ画面から写した名画ラッシュの写真が模写され、それらの表面にはすべて水玉模様が書き加えられている。ストライプや水玉模様は、模写された画像を背景におしやり、表面からの距離感を出すためのものであると、この作家は語っているが、同一平面上にある二つの画像は、その引力と斥力のせめぎあいのなかで、板状の隙間をつくりだし、それによって背景の模写された画像が平面性を取り戻すこととなる。すなわち、ふたつの画像のあいだの距離の虚構性が、背景を二重に虚構的なものにしていくのだ。この二重性によってやややこう個にある表面に封じ込められた虚構は、もはや虚構とは違ってのように機能することはない。

TOKYO

高山登
秋山西廊

9.5-9.17

否応なく意味をもってしまう意味過剰な素材がある場合、その意味をそのまま提示しないで、正反對の意味をもたせようとするならば、結果的に意味が相殺され、その微妙なバランスの中に自律した作品が残されることがある。このようにして出現した作品は、美しくも美しくもなく、ただ強烈なだけのきわめて暴力的なものとなる。それはちやうど、頭の上に迫り出した巨大な岩石のように、われわれを容赦なく脅かせるのである。それは、ほんらいそこにあっただけの意味の欠如の巨大さがつくりだす恐怖なのか、それとも、意味



高山登 Noboru Takayama
Headless Scenery/Sunrise-Sunset 1994
枕木、鉄板 インスタレーション

の相殺がくりだす緊張感なのか、いずれにせよ、その恐怖は、長くつづけば、しだいに死者を掃きぶり起こそうとする悲壮感へと姿を変えていくのである。

高山登は、一貫して枕木を使ったインスタレーションを制作している。今回の個展では、T字型に組まれた枕木の複製を鉄製の箱に

立てかけて構成されたインスタレーションが展示された。枕木の交差からはじまった、作品のなかで何気なくくりだされるさまざまな形のなかに、生體的な自然の普遍的な構造を見出そうとするこの作家にとって、わざわざ無機的なものに加工され、二度とそれ自身生き返ることのない枕木は、有機



有地左右一 Soichi Arichi
 笹岡 敬 Kei Sasaoka
 左—LUMINOUS-1994(ギャラリーサージでの展示風景)
 ミクスト・メディア 120×270cm 撮影=高井順一
 上—LUMINOUS-1994(秋山画廊でのパフォーマンス)

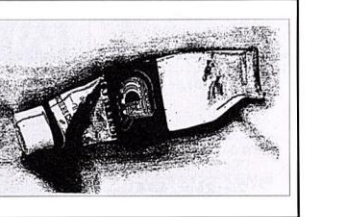
このふたつの「明かりの部屋」は十

「秋山画廊での作品は、蛍光管が一本ずつつけられて壁面に縦横に伸びるインスタレーションである。それらに通常より低い電圧をかけると、管を輪切りにしたような小刻みに震える輪が両電極から管の中心に向かって走る。その光の、空気のゆらぎは見る者を深い海底にいるような錯覚に陥れ、それはこの画廊の印象的な階段の存在も大きい。永遠なる光の輪の連鎖が気を遠くさせる。それは宮島達男のキーコンセプト「それは永遠に続く、それは変化しつづける、それはあらゆるものと関係を結ぶ」とパラレルな関係にあるのか。

洋画・額縁・石膏像・デザイン材料

画荘 ヴィナス

本社 ● 名古屋市中区新栄町3-3
 TEL (052) 951-0591 FAX (052) 971-0007
 東京営業所 ● 東京都新宿区西新宿1-15-13 (群ビル2F)
 TEL (03) 3346-2728 FAX (03) 3346-2754



階で混ざあわせる。きわめてゆつくりと溶かされ、慎重に流し込まれたワックスは、固まる前に緩やかな対流運動を行ない、しだいに中心部へと集中していく散逸構造が鮮やかな斑模様を描き出す。また、ゆつくりと沸き上がった表面の気泡が、先に固まりはじめた上面を緩やかに盛り上げていく。重さを感じさせなくするために床から少し浮き上がって設置されたワックスのかたまりは、流動体の充滿した運動のストップモーションを境界面に依存することなく直接提示している。ただ、固まってもなお柔らかく半透明なワックスという素材は、流動体と固体とのあだの往復運動の正確なシミュレーションとはならない。この作家は、コンクリートを型に入れて固める作品もつづけているのであるが、もともとが固体的な岩石の集合体であるコンクリートを、固めても流動的であることをやめたいワックスとのあいだには、やはり埋めることのできない溝があるのだ。

Tokyo
 有地左右一 笹岡 敬
 ギャラリーサージ 82293

「点滅」は逆に見る者を落つけ、心地よい眠りの国に誘うのである。

会場
 セツ・モード・セミナー 全館
 新宿区舟町15
 TEL 3357-3687

94 セツゲリラ展
 10月26日(水)~10月31日(月)
 午前11時~午後7時